

## キリシタン時代における日本のイエズス会学校教育

桑原直己

### 【1】はじめに

本稿は、キリシタン時代における日本のイエズス会学校教育の歴史を概観し、当時、草創期にあったイエズス会の教育理念が、日本という地において遂げた展開の相を解明することを目的とする。特に、日本におけるイエズス会学校が、ヨーロッパにおけるイエズス会学校の伝統が積み重ねてきた教育理念をどこまで受け継いでおり、またいかなる点で日本社会への「適応」の努力が窺われるのか、を明らかにしたい。このことにより、当時のイエズス会士たちが日本を宣教と教育との場としてどのように位置づけており、また、彼らの教育理念を実現する環境として当時の日本社会がいかなる意味を有していたかも明らかにすることと思われる。

### 【2】イエズス会による学校建設まで

日本に初めてキリスト教を伝えたのは、1549年に日本の地を踏んだイエズス会士フランシスコ・ザビエル（1506-52年）であることはあまりに有名である。ザビエルは日本人を、「これまで遭遇した〔異教徒の〕中でもっとも優れた人々」としてその資質を高く評価している。特に日本人が礼節と名誉とを重んじ、貧困を恥とせず、理性的な傾向を有する点で、優れたキリスト教徒となりうる可能性を見ていた<sup>1</sup>。このような日本人に対する高い評価は、基本的にはその後のイエズス会士たちにも受け継がれる。ザビエルと共に来日し、イエズス会の初代日本布教区長となったコスメ・デ・トルレス（1510-70年）、畿内で活躍するグネッキ・ソルディ・オルガンティノ（1533-1609年）、そして後述する巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（1539-1606年）らは、基本的には日本人を高く評価し、後に「適応主義」と呼ばれる開明的な宣教方針をとった。すなわち、ヨーロッパにおけるキリスト教の習慣を絶対視することなく、自分たちを日本文化に適応させようとした。これは、ヨーロッパ中心主義の意識のもとに宣教地の文化を見下す傾向が強かった当時の一般的なヨーロッパ人の発想を超えるものであった。

しかし、イエズス会士の中にも例外的な存在はいた。トルレスの跡を継いで日本布教区二代目の責任者となった軍人出身のポルトガル人フランシスコ・カブラル（1530?-1609年）は、基本的にアジア人である日本人を蔑視し、日本人がラテン語を習得したり、日本人を司祭とする可能性を認めようとしなかった。また、適応主義を批判した結果、宣教師の側にも日本語を習得させようとはしなかった。

一  
四  
四

<sup>1</sup> ザビエル、1549年11月5日付、ゴアのサンパウロのコレジヨのイルマン等宛書簡、村上直次郎訳 柳谷武夫編 『イエズス会士日本通信：上』、雄松堂書店、1968年、p. 4

そうした中、1579年にイエズス会東インド管区の巡察師、ヴァリニャーノが来日した。巡察師とは、イエズス会総会長の代理として世界各地で働くイエズス会士の活動を視察し、必要な指導を行う修道会の最高幹部である。当時イエズス会内部で勢力が強かったのはスペイン人・ポルトガル人であったが、ヴァリニャーノはイタリア人である。彼が巡察師という要職に抜擢されたのは、スペイン人・ポルトガル人がしばしば示していた強国意識による弊害に対する歯止めであったとも言われている。その意図は日本において実効を挙げることになる。彼は、来日するやカブラルの日本人蔑視の姿勢が布教の妨げとなっている事情を知る。激しい対立の末、1582年にカブラルを日本布教の責任者の地位から解任し、マニラへと去らせた。ヴァリニャーノにより、イエズス会の日本宣教に対する方針は、日本人の資質を高く評価するザビエル以来の基本姿勢に立ち戻った。

### 【3】 ヴァリニャーノの教育構想

ここで我々は、当時の人々の思いを想像するために、数十年後に迫害の運命が待ち受けている事実について現代人が有する知識を一旦忘れ去ってみるべきであろう。高い資質を有する民族との出会いは、イエズス会宣教師たちに大きな夢を抱かせた。ヴァリニャーノは、来日の当初からすでに日本の教会を発展させるための壮大な全体計画を考えていた、と言われている<sup>2</sup>。彼は、日本の教会の将来を切り開くためにはまず教育事業から始めるべきである、と考えていた。すなわちヴァリニャーノは「上からの布教」、すなわち社会の指導的な層にアプローチし、そこから布教を展開する、という戦略を立てている。教育もそのためのものであり、当然のことながら、真実な意味での「エリート教育」<sup>3</sup>の構想であった。それは日本が伝統に根ざした高度の文化を有する国である、との理解の上に立ってのことである。ヴァリニャーノはまず第一に、日本の教会を支えるためには日本人司祭を育成する必要があると考えた。これはカブラルの認めなかったところである。しかし彼は単に日本人に司祭への道を開くことにとどまらず、政治および文化の面で指導的な役割を果たす優れた信徒たちをも育成することによって日本の教会の基盤を整えることを構想していた。聖職者養成に限ることなく、信徒をも含めた教会指導者層の養成を構想していた点は、第二バチカン公会議が打ち出した「信徒使徒職」の思想を数百年も先取りするものであった、とも言ってよからう。また教育、それも一般信徒をも含んだ教育を通しての布教という戦略は、現代にまで続くイエズス会に伝統的な方針でもある。

ただし、それはイエズス会発足当初からのものではなかった。すなわち、当初イエズス

<sup>2</sup> ヴァリニャーノの布教・教育構想については、古典的であるが、以下のチースリク論文による紹介が簡潔にして要を得ているように思われる。

H・チースリク「日本における最初の神学校（一六〇一年—一六一四年）」（キリシタン文化研究所編『キリシタン研究』第10輯、吉川弘文館、1976年、所収）p.4-5

<sup>3</sup> イエズス会会憲第四部の第三章では、次のように述べられている。「特に、イエズス会入会の五つの主要障碍の一つに該当する者は、イエズス会経営の学校の生徒となることはできない。（生徒たちは）……模範においても、教養においても主キリストの葡萄畑のすぐれた働き手となる、そういう見込みのある生徒たちでなければならない。」

会は学校教育を目的とする修道会ではなかったのである。しかしその後、まず内部的にイエズス会士を養成するための教育機関を持つに至り、その後東スペインのガンディアの学校に1546年、会員ではない一般学生を受け入れることを経験したが、これは半ば偶発的な事態であった。1548年、外部生に開かれた形での本格的なイエズス会学校（コレギウム）が、シシリア島のメッシナの地に開設された。この頃を境にイエズス会は方針を改め、学校教育に力を入れて会の活動目的に組み込むようになる<sup>4</sup>。メッシナの学校組織を参考に1551年、ローマ学院が創立され、全ヨーロッパのイエズス会学校のモデル校となる。イエズス会は、その後ヨーロッパ各地で蓄積された学校教育の経験を総合し、『イエズス会学事規程 *Ratio Studiorum*』と呼ばれる統一した学校運営規則を作成する。その最終的な決定版は1599年に制定公布されるが、その作成作業の開始は1584年のことであった。

ヴァリニャーノが来日した1579年という時期は、イエズス会がすでにヨーロッパの地において学校教育についての十分な実績を蓄積してはいたが、統一的な『学事規程』の制定に向けて動き出す以前であったことになる。つまり、ヴァリニャーノは自分たちがヨーロッパにおいて開発しつつある最新の教育システムを日本に導入しようとしていたのである。

具体的にはまず、ミヤコ（近畿）、豊後（東九州）、シモ（下＝西九州）という三つの布教区に各一校、都合三校のセミナリヨ（ポルトガル語：seminaryo＝中等教育学校）を開いて、前途有望な青少年に人文学科の基礎的教育を学ばせる計画であった。ヴァリニャーノは直ちにその計画を実行に移し、早くも1580年二校のセミナリヨが開校された。すなわち、シモのセミナリヨは有馬晴信の支援のもとにその城下有馬（現長崎県南島原市）の地に、ミヤコのセミナリヨは織田信長の支援のもとにその城下町安土（現滋賀県蒲生郡安土町）に、それぞれ22名の生徒たちを迎えて出発した。しかし、当初豊後地区に予定されていた第三のセミナリヨについては、これを山口の地に開設しようとしたが結局政治的混乱のため実現しなかった。

セミナリヨの上にはミヤコと豊後との二箇所コレジヨ（ポルトガル語：collegio＝高等教育機関）を設置することになっていた。セミナリヨでの3年ないし4年の勉学を修めた後、学生たちには神学を学び司祭を目指す道と、一般信徒として学問を修める道とを自由に選ばせる予定であった。そのため、ミヤコに設置するコレジヨには、教区司祭を養成するための神学課程を、また、大名をはじめとする武士階級の子弟を社会的指導層をなす信徒として養成するために哲学・法律・政治などの課程を置く計画であった。ヴァリニャーノは、「将来的にはこのコレジヨを東洋におけるキリスト教的教育と学問研究の中心とし、ヨーロッパの諸大学と交流させることを」<sup>5</sup>夢見ていた。また、セミナリヨを修了した後イエズス会入会を志願する学生のため、豊後の臼杵（現大分県臼杵市）にノヴィシアード（ポルトガル語：noviciado＝修練院）を開設し、特に外国人宣教師の準備教育と語学養

<sup>4</sup> イエズス会が学校教育、それも会員外に開かれた学校教育に関与してゆく経緯については以下を参照。

高祖敏明「草創期のイエズス会学校—コレギウムの誕生・発展史を中心に—」（上智大学教育学科『教育学論集』第14号所収、1980年）

<sup>5</sup> 長崎県北有馬町編『「有馬のセミナリヨ」関係資料集』2005年、p. 7

成のためのコレジヨを大村に開設する計画であった。一般にノヴィシアード（修練院）とは、カトリック教会における修道会に新たに入会した者のための初期養成機関のことである。臼杵のノヴィシアードは1581年に実現する。コレジヨは最終的には豊後の府内（現大分県大分市）に一校のみ開設された。日本人・外国人の別を問わず、イエズス会士の養成としての哲学および神学の課程はそこに置かれることになった。1584年には、府内のコレジヨで最初のスコラ哲学の講義が行われている。

ヴァリニャーノの計画がもし完全に実現していたならば、最終的には毎年300人の日本人青年が高等教育を受け、司祭、修道士、信徒として日本社会を指導するエリート集団を形成する筈であった。しかし、結局この計画は完全には実現することなく未完成に終わる。実現されたのは有馬（シモ）と安土（ミヤコ）の二箇所のセミナリヨ、臼杵のノヴィシアード、そして豊後府内のコレジヨだけであった。挫折の原因としてまず挙げられるのは、1582年に起こった本能寺の変以降の政治的争乱である。その結果、ミヤコに新たにコレジヨを開設するどころか、セミナリヨすらもミヤコから避難せざるを得ない状況となった。また、当時の日本教会には、このあまりにも壮大な構想を実現するだけの人材も財政的基盤も不足していた点も指摘されている。

ヴァリニャーノは一旦日本を離れていたが、自分の教育計画が予定通りに進まない状況について逐一報告を受けていた様である。結局ヴァリニャーノは聖職者、特に日本人司祭の養成を目指すことを優先させることとした。彼が日本人司祭の養成を急務と考えた背景には、宣教師の数的な不足という深刻な状況があった。当時15万人のキリシタンに対してイエズス会士は55人、うち日本人修道士は7人、日本人司祭はまだ一人もいなかった。

かくしてセミナリヨ、コレジヨは聖職者の養成へと目的が限定されたため、それ以外の子弟は入学させないことになり、現代の「神学校」に相当するものとなった。セミナリヨは、現代では司祭を目指す中学・高校生が学ぶ「小神学校」に相当するものとなり、そこではおよそ10歳から18歳までの少年たちが語学や人文学の基礎を学ぶこととなった。卒業生は何らかの意味での聖職への道を歩むことになるが、イエズス会入会、教区司祭、伝道士という可能性があった。セミナリヨからイエズス会に入会した者は、ノヴィシアードにおいてイエズス会士としての初期養成を受けた後、コレジヨに進学する道が開かれていた。

実際のセミナリヨ、コレジヨが「神学校」としての限定された性格のものとして歩み始めたものの、ヴァリニャーノは当初の大教育構想を断念していたわけではなかった。彼は『日本諸事要録』の第12章の中で、人材と財政とに余裕が生じたあかつきには一般子弟のためのセミナリヨを創設する決意を述べている。しかしながら、1587年の秀吉によるキリシタン禁令の発布とその後の政治情勢によってヴァリニャーノの夢はついに実現することなく終わるのである。

ヴァリニャーノが計画した教区神学校は、後になって日本布教区が独立した司教を戴く教区となり、1593年に司教に叙階されたイエズス会出身のルイス・セルケイラ（1552-1614年）が1598年に来日してから1601年に実現する。ヴァリニャーノは教区神学校についてもミヤコのコレジヨの中に開設することを夢見たが、実際にははるかに小規模な形で長崎で成立する。

以下に、実現された有馬と安土のセミナリヨ、臼杵のノヴィシアード、府内のコレジヨ、そして教区神学校のそれぞれについてその沿革と教育内容とについて概観する。

【4】 セミナリヨ<sup>6</sup>

## (一) 沿革

先述のとおり、ヴァリニャーノの構想したセミナリヨのうち、実現したのは有馬と安土の二校であった。これらのうち、当時の政治情勢の影響を直接被り、変転の歴史をたどる安土のセミナリヨについて先に触れることとする。

「ミヤコ」のセミナリヨは文字通り京都に建てることも検討されたが、京都では武力を帯びた仏教勢力による反発が予想され、安全という点で難があった。仏教勢力を牽制する意図をもつ織田信長はキリスト教に対して好意的であったので、セミナリヨは信長の保護のもと、彼が新たに築いた城下町安土に建てられることとなった。

安土のセミナリヨは純和風建築三階建てで安土城と同じ青い瓦を用いることが許されており、茶室まで付属していた。責任者となったオルガンティノは入学者募集のために高山右近に協力を要請し、右近はこれに応じてキリシタンである家臣の子弟8名を安土に送った。安土のセミナリヨは、彼らを含めて総計22名の生徒を迎えて発足するが、最初の生徒たちの中には、後になって長崎で殉教するパウロ三木や元和の大殉教で死んだアントニオ三箇がいた。

しかしながら、その設立の当初は順風満帆と見えた安土のセミナリヨは変転の歴史を歩むこととなる。まず創立2年後の1582年、早くも本能寺の変が起り、明智光秀の軍勢による破壊によって安土城と町とが焼け落ち、当時30名ほどいた生徒たちは危険を冒して脱出し、まず京都に、ついで高槻へと移動した。次いで1585年、保護者であった高山右近の高槻から明石への転封に伴い、セミナリヨは大阪に移動する。しかし、さらに2年後の1587年、豊臣秀吉の禁教令によって九州への移転を余儀なくされた。生徒および神父たちは平戸の生月、さらに11月には長崎に移り、その後有馬のセミナリヨと合併する。

このように頻繁な変動を被ったため、安土のセミナリヨにおける勉強は著しく妨げられた。ラテン語および音楽のすぐれた教師であったシメアン・デ・アルメイダ修道士を1584年に失ったことも大きな打撃であった。安土のセミナリヨを信長が訪問した際、生徒たちはオルガン、クラヴオ、ヴィオラの演奏を披露したことが記録されている。しかし、1588年の学生名簿には、音楽の授業についての言及がない。恐らく1582年の避難の際にこれらの楽器は失われ、アルメイダの死後は音楽の教師も欠いていたためと思われる。

「シモ」の布教区のセミナリヨは、1580年10月、若き領主有馬晴信の全面的な協力と援助のもと、有馬領日野江城下に発足した。晴信はこの年の3月に洗礼を受けていた。

「キリシタンになったばかりの若き大名は、ヴァリニャーノ神父の教育計画に大いに共鳴し出来るだけの援助を約束した。晴信はセミナリヨの敷地を神父たちに与え、建築に当たっても全面的に協力したので、生徒30人を収容出来る校舎が完成した。有馬の地名を冠して「有馬のセミナリヨ」とも呼ぶ。最初の入学生は22名。その中に伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアン、コンスタンチノ・ドラードら少年使節団のメンバー、有馬の西ロmano、平戸の木村セバスチャンらがいた。」<sup>7</sup>

<sup>6</sup> セミナリヨについては主として『有馬のセミナリヨ 関係資料集』に依拠している。

<sup>7</sup> 『有馬のセミナリヨ 関係資料集』、p. 8

創設期の1580年から1587年までの間、セミナリヨは北有馬の日野江城下に置かれていた。1587年、避難してきた安土のセミナリヨを吸収して一つになったセミナリヨは一時長崎に移るが、その後再び有馬に戻り、1601年から1612年までの間、有馬の地で「セミナリヨ教育の最盛期」とも呼ばれる時期を迎える。その後セミナリヨは、加津佐、天草などを転々とし、最終的には、1614年の徳川家康の禁教令によって閉鎖された。生徒たちのあるものは潜伏し、あるものは勉学を続けるためマカオやマニラに逃れた。セミナリヨの卒業生の中からは何人ものイエズス会士が出ているが、やがて厳しい迫害の時代を迎え、殉教や国外追放という運命に直面することとなる。

## (二) 教育内容

セミナリヨの教育方針を定めたのはヴァリニャーノである。彼はセミナリヨの設立を決定するやすぐさま1580年1月、『日本のセミナリヨ規則』を自ら執筆している。そこでは「セミナリヨの収容人数、入学資格、施設の立地条件と備えるべき設備、管理運営の在り方、生活指導、教育内容、時間割と細部に互る取り決めを定めている。」<sup>8</sup>

先述のとおり、当時ヨーロッパのイエズス会は、会が運営する学校のため『イエズス会学事規程』と呼ばれる統一した学校運営規則を作成しつつあった。『学事規程』の作成作業は1584年から始まり、1586年の第一次草案、1591年の第二次草案を経て、1599年に最終的な決定版が制定公布される。ヴァリニャーノの『日本のセミナリヨ規則』は、この『学事規程』成立以前に作成されていることは注目に値する。つまり、日本におけるイエズス会学校の試みは、ヨーロッパにおけるイエズス会学校が自らのスタイルを確立してゆく試行錯誤の時期と同時進行していたのであり、文字通り最先端の学校教育システムの導入を意味していたのである。しかしながら、ヴァリニャーノはヨーロッパの学校制度をそのまま導入しようとしたわけではなかった。彼は「イエズス会教育の精神と教育方針に従いながら、文化の伝統の全く異なった日本に適應した教育方針を定めた。日本人をヨーロッパ人に変えるのではなく、日本人の持たなかったヨーロッパ的、キリスト教的なものを身に付けた調和した人間の養成」<sup>9</sup>を目指している。

当時のヨーロッパはルネッサンス以来の人文主義が盛んであった。人文主義的教育は、言語能力の訓練と古典の学習とをその本質としている。ヨーロッパのセミナリヨでは、人文主義の精神に従ってラテン語、ギリシア語による古典教育が中心であった。日本のセミナリヨでの教育内容も古典教育に力が入れられていたが、『日本のセミナリヨ規則』ではギリシア語を排し、ラテン語の古典と日本の古典とを学ぶよう定めている。

当時のカトリック教会および学問の世界の公用語であったラテン語の学習は不可欠のものであった。先述のカブラルは日本人にはラテン語習得は無理だと考えていたが、ルイス・フロイスはセミナリヨでラテン語を学ぶ日本人生徒の習得の速さに驚嘆している。また、イエズス会士たちは生徒たちが将来日本で宣教する宣教師となるために、日本語にも

<sup>8</sup> 『有馬のセミナリヨ 関係資料集』、p.12

また、同書には『日本のセミナリヨ規則』の原文 (p.29-36) および邦訳 (p.20-26) が収録されている。

<sup>9</sup> *ibid.*

とづく言語教育として日本の古典文学を学ぶことが必須と考え、平家物語などをテキストとして学ばせた。

さらに従来の日本にはなかった教育内容として、音楽教育と体育とが導入されている点が目立つ。音楽教育としては、前述のアルメイダ修道士らの指導のもと、フルート、クラヴィオ、オルガンなどの器楽演奏とグレゴリオ聖歌や多声の合唱聖歌などの練習が行われた。体育に関しては、夏には水泳訓練がおこなわれ、週末には生徒全員が弁当持参でピクニックに出かけたりしていた。また、イエズス会学校は学校教育の場に演劇を導入する伝統を有していた。復活祭やクリスマスといった大きな祭日には文化祭が行われ、生徒たちは演劇や歌唱、ラテン語の演説などにおいて日頃の教育成果を披露した。

また、注目すべきなのは、セミナリヨにおいてすでに一定の神学的基礎教育がほどこされていたこと、また特に今日で言うところの「宗教学」の授業、すなわち仏教をはじめとする日本の宗教についての知識教育がなされていたことである。

ヴァリニャーノは、『日本のセミナリヨ規則』において完全な学寮制度を採用している。ヨーロッパでは、1599年の『イエズス会学事規程』においても学寮制度は採用されてはならず、これは日本という場を考慮した独自の方針と言える。ヴァリニャーノは、日本社会が非キリスト教的環境のもとにあることを考慮し、将来の司祭を養成するため少なくとも勉強期間には外部社会からの「見えないカリキュラム」の影響力を遮断したキリスト教的環境のもとで、徹底したキリスト教的教育を施そうとしたものと考えられる。セミナリヨの「時間割」も、こうした方針を貫徹させるために考え抜かれたものであった。

ヴァリニャーノは、日本の実状に即した教科書を作成するために印刷機を導入することを希望していた。彼の念願は、後述するコレジヨが加津佐にあった1590年、帰国した少年使節団がヨーロッパから持ち帰った活版印刷機をそこに設置するに及んで実現し、いわゆる「キリシタン版」と呼ばれる多数の出版物が発行されることとなる。その中にはセミナリヨの教科書類も多数含まれていた。

## 【5】 ノヴィシアードおよびコレジヨ<sup>10</sup>

### (一) 沿革

ノヴィシアードおよびコレジヨの設立は、当時キリスト教の有力な庇護者であった大友氏が支配する豊後の地に実現した。

ノヴィシアードは最初は1581年に豊後国臼杵に開設された。大友義鎮（宗麟）は、1576年に息子の義統に家督を譲るが、臼杵の丹生島城に居を移して二元統治を行っていた。そのため、臼杵も実質的には大友氏の城下町となっており、府内から宣教師や信者が移り住み、天主堂などが建設され栄えていた。ノヴィシアードでは、当初、日本人6名、ポルトガル人6名の修練者を迎えていたとされる。後になって、大友氏が没落しその庇護を得ら

<sup>10</sup> ノヴィシアードおよびコレジヨについては主として以下に依拠している。

純心女子短期大学・長崎地方文化史研究所編『長崎のコレジヨ』聖母の騎士社、1985年

H・チースリク『府内のコレジヨ』（キリシタン文化研究所編『キリシタン研究』第27輯、吉川弘文館、1987年、所収）

れなくなると、ノヴィシアードは長崎に移り、さらに有家、天草へと移転した。

コレジヨも、1580年に大友氏の本拠地である豊後国府内（現大分県大分市）に開設された。1586年までコレジヨは府内にあったが、その年、薩摩の島津家久による焼き討ちに遭い府内が壊滅するに及び、山口に移り、1年後の1587年7月27日、秀吉の宣教師追放令によって平戸の生月に移された。禁教令にもかかわらず、1588年2月頃、コレジヨは千々石の釜蓋城の陰で新しく活動し始めた。しかし、千々石でも長く続けることはできなかった。1589年に有馬、そして1590年には島原の加津佐へ、そして1591年、天草の河内浦に落ち着くことができた。天草では7年間にわたって積極的な活動を見せた。この時代には、後に日本の教会に力を尽した日本人修道士と司祭が多く養成されたが、1597年、二十六聖人の殉教後、コレジヨは長崎に移され、徳川の禁教令まで長崎に置かれることになる。先述のとおり、日本最初の活版印刷機は加津佐時代のコレジヨに導入され、「キリシタン版」の出版はそこで行われた。

本来コレジヨは、聖職者育成のためのみならず、広く一般教養をも含んだ高等教育機関であった。しかし、先述の事情により、主として司祭養成のための「大神学校」としての性格を帯びるようになってゆき、府内に実現したコレジヨはもっぱらイエズス会司祭を養成することを目的とするものとなった。教区司祭養成のための神学校については【6】で後述する。コレジヨは、日本人を司祭として養成するためのみならず、ヨーロッパやインドから渡来した外国人、さらには日本でイエズス会に入会した外国人をも含めての養成機関として計画されていた。

なるべく徹底した学問的養成を受けることが求められていたヨーロッパのイエズス会士たちは、有力な大学において当時最高の教育課程を修了していた。その教育課程は、まず2～3年間にわたるラテン・ギリシア文学を中心にする「人文課程 Humaniora」、次いで4年間の「哲学課程 Artes, Philosophia」と4年間の「神学課程 Theologia」とからなっていた。ヴァリニャーノは、日本国内のコレジヨにおける高等教育課程についても、可能な限りヨーロッパの高等教育の水準を保つ形での枠組みを実現させるべく努めた。しかし、幾つかの点で日本の国情に即した対応をとっている。

ヴァリニャーノはまず、府内のコレジヨにおいては人文課程の設置から出発し、神学生がその目標に達した2、3年後に哲学課程を開始し、さらに2、3年たってから神学課程を設置することを計画した。先述の通り、当初の計画では、この哲学・神学課程のためのコレジヨはミヤコに設立する予定であった。セミナリヨと同様に、人文課程の設置は直ちに着手され、1580年からスタートしている。

ルネサンス以降、当時の教育思想を支配していた人文主義的教育理念は、まずは言語訓練を中心とするものであった。ヨーロッパにおいては、西洋文化の源流をなすギリシア・ラテンの古典文学の学習に力が入れられていた。キリスト教的人文主義においては、これに加えて教父の著作について学ぶのが常であった。ヴァリニャーノは、日本のコレジヨにおける人文課程についても古典文学の学習を中心に構想していた。しかしながら、セミナリヨに関連してすでに述べたように、彼は、西洋文化と日本文化とを調和的に学ばせることを意図していた。そのため、ヴァリニャーノの教育規則では、西洋文化に関してはラテン語およびラテン文学のみを学ばせることとし、ギリシア語およびギリシア古典の学習に代えて日本古典文学、たとえば平家物語などを学習させることとした。

1580年、府内のコレジヨが人文課程からスタートした時点では、日本人のイエズス会士はまだ白杵で修練中であつた。したがって、府内のコレジヨの最初の学生は、2、3年ほど前にイエズス会に入会し、日本国外で修練を済ませたポルトガル人神学生だけであつた。日本語および日本文学についての教育は、ラテン語・ラテン文学と並ぶ人文課程におけるもう一つの柱であつたが、ヴァリニャーノは、来日後まだ日も浅かつたポルトガル人神学生向けに日本語の教科書を作成させた。1581年度イエズス会年報で、「日本語の文法書は本年完成し、また辞典と日本語著述数種ができた」との記述が見られるが、それらの教科書についての詳細は不明である。ポルトガル人神学生たちの日本語習得がある程度進んだ段階で、彼ら自身の訓練をかねて次第に布教活動にも参加させるようにした。

1583年、予定された人文課程を修了した神学生は、ミヤコに新設されるコレジヨに移り、そこで哲学課程を学び始めるはずであつた。しかし、本能寺の変以降の動乱のため、哲学・神学課程のために予定していたミヤコのコレジヨの設立は不可能となつた。そのため、当時マカオに滞在中であつたヴァリニャーノは、予定を変更して哲学課程を府内のコレジヨで始めるように指示したと考えられている。

ヨーロッパの一流大学においては、哲学課程はたいてい3～4年かけて「論理学 Logica」、「心理学 Psychologia」、「自然哲学 Cosmologia」、「倫理学 Ethica」を学び、これを卒業すると Magister Artium (M.A.) という学位が得られ、哲学の講義を行なう資格が与えられた。おおむね現代の日本の「修士」号に該当するものであつた。しかし、ヴァリニャーノは、日本ではこの課程を短縮し、2年と見積つた。彼はヨーロッパを土壌として論議された特殊な問題を省き、むしろ日本のために必要な課題をとりあげるようにと指示した。そして日本のために特別な教科書を作成することを総会長に依頼した。

こうした課題に応えるべく、以前コインブラ大学で2回にわたり4年間の哲学課程の講義をした経験を持つペドロ・ゴメス(1535-1600年)が哲学の教授として日本へ派遣された。ゴメスは船の難破に苦しみながらも1583年の秋、日本に到着したが、先述のとおり、この時点ではミヤコのコレジヨ設立はすでに不可能となつていたので、彼は豊後布教区の長に任命された。哲学課程の授業は、1583年10月21日に、まず「論理学 Logica」から開始された。学年進行に従い、最初の学生が哲学課程を終える2年後の1585年4月から神学課程が開始された。

1585年度のイエズス会年報には「復活祭(註、1585年4月21日)が過ぎて、ペドロ・ゴメス神父は神学の講義を始め、アントニオ〔フレネスティノ〕神父は秘跡の講義を始めた。白杵の修練院から日本人修道士4、5人が府内のコレジヨに来て、ラテン語の学習を始めたが、当国人は鋭敏で、大いなる判断力があるので、良好の成績をあげ、ヨーロッパの神父や修道士たちの驚嘆するところとなつた」<sup>11</sup>との記述がある。

この記述から、新たに修練院からコレジヨへと進んできた神学生、それもラテン語を優秀な成績で習得した最初の日本人神学生が人文課程に進み、そのときまで哲学課程にいた神学生のために神学の講義が始められたことが窺われる。「神学」の内容は、トリエント公会議の規定に即した簡潔な教理神学であつたと考えられている。告解を聴くことを中心

<sup>11</sup> [イエズス会編] 村上直次郎訳、柳谷武夫編輯『イエズス会日本年報：下』、雄松堂書店、1969年、p.1

とする司祭としての司牧のためには、決疑論的な倫理神学が重視されていた。倫理神学は当時 *Causa conscientiae* 略して *Causa* と呼ばれていたが、府内の講義は *Theologia* と呼ばれていたため、おそらく「教理神学 *Dogma*」であったと考えられている。ゴメス自身がこれを担当していた。

(二) 『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』<sup>12</sup>

ゴメスは、日本のコレジヨで蓄積した講義内容を、一連の教科書へとまとめ上げた。『天球論』、『靈魂論』、『真実の教（神学）』の三部から成る『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』である。執筆年代は1592～3年と考えられている。その写本の一つが、現在もローマのヴァチカン図書館に保存されている。また、その日本語本は1595年に成立している。

(a) 『天球論』

『講義要綱』の第一部をなす『天球論』は自然科学を扱っており、さらに二部に分かたれている。

『天球論』第一部は、アリストテレスおよびプトレマイオスの流れを汲む天文学の体系をヨハネス・デ・サクロボスコの『天球論』(*Joannis de Sacro Busto, Libellus de Sphaera*)に基づいて編纂したものである。しかしながら、原著と比較した場合、1582年にグレゴリウス十三世によってなされた改暦などについての詳細な記述が組み込まれたこと、反面、気候帯や星の出没についての箇所を簡略にするなどの点で、日本人に紹介するための配慮を示している点などがゴメス独自の点とされている。

『天球論』第二部では「月下界について」と題して、四元素論・地球論・気象論が論じられている。こうしたテーマについては、上述ヨハネス・デ・サクロボスコの『天球論』では扱われていない。第二部の内容は、ゴメス自身がかつてコインブラ大学で講じたトマス・アクイナスの『アリストテレス註解』(*S. Thomae Aquintis, In Aristotelis Libros de Caelo et Mundo, De Generatione et Corruptione, Meteorologicorum Expositio*。アリストテレスの天地論、生成消滅論、気象学の各註解)から、その基礎を得たものと考えられている。

『天球論』の構成および内容は、17世紀末の洋学者小林謙貞が記した『二儀略説』とほとんど同じのものであり、『二儀略説』が禁教時代に密かに伝えられたゴメスの『天球論』を小林が紹介したものであることが知られている。『天球論』は、大地球体説を知らなかった当時の日本人に、初めて科学的な宇宙観を体系的に理解させようとした最初の試みであった。尾原悟は「ゴメスはギリシア以来の中世的・伝統的世界像をそのまま踏襲してその要約を紹介したのではなく、ルネサンス的な近代科学への新しい課題を含め、日本に必要な科学思想を実証的考察とともに論じている」<sup>13</sup>と指摘している。

(b) 『靈魂論』

『講義要綱』第二部は『靈魂論』である。日本語の表題には「アニマノ上ニ付テアリストウチリスト云天下無双ノヒロウソホノ論セシー決ノ条々」とある。つまり本巻はアリス

<sup>12</sup> 尾原悟編著『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』I～III、教文館、1997年

<sup>13</sup> 尾原悟『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』I 解題・解説、p.457

トテレスの『靈魂論』の註解であり、カトリック教会においてアリストテレス註解者として最も権威を有していたトマス・アクィナスの *In Aristotelis Librum de Anima Commentarium* (アリストテレスの『靈魂論註解』) を基礎としたものである。

ゴメスの『靈魂論』はさらに三部に分かれるが、それはアリストテレス『靈魂論』の構成に従ったもので、第一部では靈魂一般と靈魂の各論、第二部では感覺的靈魂とその機能、第三部では知的(理性的)靈魂とその能力について論じられている。

イエズス会の教育の方針では、哲学課程において学生たちに「Logica (論理学)・Ontologia (存在論)・Critica (認識論)・Physica あるいは Cosmologia (自然科学・自然哲学)・Metaphysica (形而上学)・Psychologia (心理学的人間論)・Ethica (倫理学) など」を習得させることになっているが、ゴメスは『靈魂論』において哲学の学習を集約させようとしていたようである。

『靈魂論』という素材を選択したのは、西洋人と日本人との間であって靈魂観の相違が特に甚だしかった、という事情が挙げられる。すでに、ザビエルも書簡のなかでこのことに言及して、日本人は靈魂 *anima* の働きについて自分たちとかけ離れた異なった考えを持っていること<sup>14</sup>を指摘している。その後も、仏教僧との論争に際して常に問題となるのが靈魂論、すなわち人間が理性的靈魂と身体とから成り、理性的靈魂は不滅にして非物質的存在である、というテーゼをめぐってのことであった。山口で討論したフェルナンデスはザビエルに宛てて、21箇条にわたる「人々が発した種々の質問」を報告し、その中で第一に靈魂問題を取り上げている<sup>15</sup>。信長の面前で日乗と論争したフロイスも、身体に内在するが物質に支配されることのない理性的靈魂が人間の生命と人格性の原理である、と主張している。靈魂論は、日本宣教の初期から一貫してイエズス会士たちにとっての最も重要な哲学的問題であった。ゴメスが『靈魂論』を哲学の主要テキストとして取り上げたのは、おそらくそうした問題意識に基づくのであろう。尾原は、この『靈魂論』について次のように解説している。

「論を進めるに当たって、論理学や存在論・認識論に触れ、方法論として採り入れ、自然神学とも関連付けているが、あくまでも主たる論の展開は、科学とも言える生物学心理学的な面から出発して人格の独立性、人間の自由な意志、人間性の尊厳<sup>16</sup>へと導かれ、哲学的人間論によって貫かれている。それは、教訓や倫理以前の根本的な人間存在が動植物と質を異にする精神的存在であることと、不滅の存在であることの二点の強調は、キリス

<sup>14</sup> ザビエル、1549年11月5日付、ゴアのサンパウロのコレジヨのイルマン等宛書簡、『イエズス会士日本通信; 上』p. 6

<sup>15</sup> フェルナンデス、1551年10月20日付、ザビエル宛書簡、『イエズス会士日本通信; 上』p. 30以下。

<sup>16</sup> こうした「人格の独立性、人間の自由な意志、人間性の尊厳」の根拠をなすものとしての「理性的靈魂 *anima rationalis*」についての考え方は、「知性」が個人の靈魂に内在するか、離在するか、という点について曖昧さを残したアリストテレスの『靈魂論』に対するトマス・アクィナスによる解釈に依拠している。こうした問題領域におけるトマスのアリストテレス解釈については、筆者も以下の拙稿で論じている。

拙稿「トマス・アクィナスにおける「能動知性」と「個としての人間」(日本哲学会編『哲学』No.47、1996年所収、p.197-206)

ト教が日本との出会いで最も煮詰めなければならぬ問題であったからである。『デ・アニマ』はこの意味で日本の歴史的背景と精神的風土に対して、迎合的妥協でも全面的否定でもない人間そのものへの問い掛けを通しての深い出会いの試みであった。第三巻末尾の「アニマラシヨナルノ正体ハ不滅ナリト云事」という抜き書きは、ラテン語本『講義要綱』にはないもので、『二儀略説』と同じく最も日本で強調したいと考えて付け加えたものである。<sup>17</sup>

(c) 『真実の教（神学）』

『講義要綱』第三部は、『真実の教』（*Catholicae veritas* / *Compendium* 『カトリックの真理の要綱』）と呼ばれる教理神学書である。

当時のカトリック神学については、プロテスタント教会の台頭とトリエント公会議（1545-63年）という背景を抜きにしては語り得ない。トリエント公会議は教理教育を重要課題と認識し、1563年、『ローマ・カテキスムス』が編纂される。公会議自体、ルター、カルヴァンらによる信仰上の問題提起が契機となっていることは言うまでもない。「教理問答書」という形式による『カテキズム』教育はプロテスタント側が力を入れ、その伝統は現代にまで及んでいるようである。『ローマ・カテキスムス』の編纂はこれに刺戟され、これに対抗するためのものであったとも考えられる。『真実ノ教』の冒頭では、『講義要綱』が基本的にトリエント公会議の方針を尊重し、これに則っていることが記されており、事実『真実の教』の内容は『ローマ・カテキスムス』のそれとほぼ一致している。

「一卷ニハ、ヒイテスノ上ヲ論ス。」すなわち信仰論である。これは、「真実ノ教」の約半分の分量を占める。その中の特に四六以下では「エケレシヤ」について、すなわち教会論が展開されている。そこでは、「同じキリスト教信仰の告白によって、また、合法的な牧者の指導のもとに同じ秘跡を受け、とくに地上におけるキリストの唯一の代理者であるローマ教皇のもとに集り、一致した人びとの集団である」カトリック教会というトリエント公会議の立場が強く打ち出されている。

「二卷ニハ、デウスノ御掟ノ十ノマンタメント、恵化レシヤノ五箇条ノマンタメントノ上ヲ論ス。」これは、十戒および「教会の五つの掟」についての解説である。

「三卷ニハ、セツノサカラメント、スピリツ サントノドント云テ、御与ヘノ事ヲ論ス。」すなわち、秘跡論である。上述の教会論にもとづくカトリック教会を神と結びつけ、また、教会の交わりを強めるものとして秘跡を位置づけている。

「四卷ニハ、キリシタンノ上ヲ論ス。」これは、『ローマ・カテキスムス』では「祈り」を論じた部分に相当するはずの部分であるが、『講義要綱』では省略されている。尾原はこの省略について「祈りに関しては、既に刊行済みのルイス・デ・グラナダの『祈りについて』や『ローマ・カテキズモ』を参照するようにと、ここでは省いたのであろう」としている。

「五卷ニハ、善悪ノ上ヲ論ス。」これは具体的には「ビルツウデ」について扱う徳論である。『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』Ⅲ解説の p.315以降に、徳論の内容・構成が一覧表に図示されている。これを一見して明らかなことは、この内容はトマス・アキナス

<sup>17</sup> 尾原悟『イエズス会日本コレジヨの講義要綱』Ⅰ解題・解説、p.462

が『神学大全』第Ⅱ部において、信仰、希望、愛、賢慮、正義、節制、剛毅という七元徳を柱とし、それらの諸徳に属する行為、それらに反する悪徳や罪について扱っている構成に準拠している点である。

尾原は、こうした徳論が置かれていることの意義として、「しばしばキリスト教倫理・道徳が神の裁き、罰を示して恐れから罪を避けるようにすすめる「なかれ、べからず」の禁止事項の羅列と受け取るむきもあるが、『講義要綱』では弱さを越えて進むべき積極的な人間性の探求に主眼が置かれている」<sup>18</sup>と指摘している。

これは、アリストテレスの徳倫理学を取り入れたトマス倫理学全体の基本的特徴を捉えた指摘と言える<sup>19</sup>。現代に至るまでイエズス会教育の特徴は、世界に対する肯定的な態度にあり<sup>20</sup>、基本的にそれはトマス倫理学の本質と一致している。

## 【6】 教区神学校<sup>21</sup>

1588年、日本の教会は教皇シクスト5世により独立の司教区として認められ、司教座は豊後国府内に置かれることとなった。初代および二代目の府内司教は本格的にその職に当たることができなかったが、三代目のルイス・セルケイラ司教が1598年来日し、1601年に初めて日本人を司祭に叙階すると同時に、教区司祭のための神学校が設立され、1614年、家康による禁令まで存続する。神学校は、施設としては当時長崎にあったコレジオ内に設置されていた。セルケイラ司教自身がいずれ本来の司教座の場である府内に移るつもりで、そのことが可能となるまで長崎コレジオを仮住まいとしており、神学校はその司教と共にあったからである。しかし1607年、府内に移ることが不可能と判断された時点で、長崎コレジオとは別棟を建て、司教館と神学校とはそこに独立することとなる。

神学校を開校するに際して、セルケイラ司教が目指した教育目的は教区神学校のそれ、すなわち、教区司祭および司牧者として相応しい人材の養成ということであった。したがって、学問を追求する大学の教育理念とは異なり、「小教区の司牧について熱心で善良な司祭を養成」することを目指し、「学問よりはむしろ堅固な修徳および実践神学における訓練に重点をおいた」のであった<sup>22</sup>。

神学生たちは全員有馬のセミナリヨの課程を修了しており、そこでは先述のとおり、一般的教養科目のほか、神学と宗教学の基礎教育が施されていた。さらには、彼らの大半は、伝道士や説教者としてすでに宣教活動の実績も積んでいた。必要とされていたのは、

<sup>18</sup> 尾原悟『イエズス会日本コレジオの講義要綱』Ⅲ 解題・解説、p.315

<sup>19</sup> トマスにおける徳倫理学全体が有する意義については以下の拙著参照。

拙著『トマス・アキナスにおける「愛」と「正義」』、知泉書館、2005年

<sup>20</sup> イエズス会教育使徒職国際委員会編、高祖敏明訳『イエズス会の教育の特徴』中央出版社、1988年、p.24

<sup>21</sup> 教区神学校については主として以下に依拠している。

H・チースリク「日本における最初の神学校（一六〇一年—一六一四年）」（キリシタン文化研究所編『キリシタン研究』第10輯、吉川弘文館、1976年、所収）

<sup>22</sup> チースリク、1976、p.14

司祭としての活動に固有な知識を充分な形で与えることであった。当時の見解によれば、それは特に「良心問題 Casus conscientiae」についての研究、すなわち決疑論的な「倫理神学 Casuistica」であった。司祭としての司牧活動に特に固有な点は聴罪、すなわち信徒たちに告解の秘跡を授けることにあった。聴罪は信徒に対する霊的指導にとってこの上なく重要な場面だったからである。

ヨーロッパにおいても、司祭を養成する神学校では、実践的な神学、具体的には倫理神学と教会法とが重視されていた。特にイエズス会士たちは、司牧と布教のために働くことを使命としているので、その養成課程では実践倫理が重視された。1599年に完成した『イエズス会学事規程』では、「倫理神学 Casuistica」の講座をすべてのイエズス会の学校に設けることを命じている。長崎の神学校にあってもセルケイラ司教は「倫理神学においてよく訓練された人、最も実践的な司牧者を養成すること」<sup>23</sup>を目指していた。学者が必要とされた時には、学問上の専攻と神学の学位のために、適当な候補者をローマか他の諸大学に送ればよいと考えられた。神学校ではイエズス会が倫理神学のために二人の神父を教授として提供し、彼らはローマ大学を模範として毎日各人一時間「倫理神学」すなわち「良心問題」について教えた。そのほか講義に対する復習と討論も行なわれていた。

## 【7】 結語

当時のイエズス会士たちが日本を宣教と教育の場としてどのように位置づけており、また、彼らの教育理念を実現する環境として当時の日本社会がいかに捉えられていたか、という本稿冒頭の問いに簡潔に答えることにより本稿を締めくくるとする。

当時の日本におけるイエズス会学校教育の全体計画はヴァリニャーノが構想し、コレジヨの教育内容はゴメスが骨格を作ったと見てよい。彼らがヨーロッパにおけるイエズス会学校の伝統が積み重ねてきた教育理念をどこまで受け継いでおり、またいかなる点で日本社会への「適応」の努力が窺われるのか、をまとめてみよう。

当時のイエズス会学校が伝統的に築き上げてきた教育理念とは、一言で言えばキリスト教的人文主義教育に他ならなかった。ヴァリニャーノは、基本的には人文主義的な精神にもとづく形でのヨーロッパの学校教育を日本に導入しようとしていた。ただし、先述のとおり、ヨーロッパにおける人文主義教育がラテン語、ギリシア語による言語の訓練と古典教育とが中心であったのに対して、ヴァリニャーノは、日本語教育および日本の古典についての教育をもってギリシア語およびギリシア古典に代えた。この時期、ヨーロッパにおいても未だ「国語教育」なるものは発展していなかった事情を考慮するならば、彼らがいかに日本文化との真剣な「対話」を志向していたかが窺われる。

また、ゴメスが主導して築き上げていったコレジヨの教育課程においては、日本人の合理性を受け入れる精神に答える形で日本に初めて西洋における最先端の自然科学的知識を伝えると共に、トリエント公会議の精神にもとづく当時のカトリック教会としては最新の神学的枠組みを日本に伝えようとしていた。特に注目すべき点は、哲学課程の教育におい

<sup>23</sup> チースリク、1976、p.17

て、アリストテレスの『靈魂論』を題材としたことには、特に靈魂の概念をめぐる当時の日本人の宗教観に対して真剣な対話を試みようとしていたことが窺われる。

我々は、彼らが「ヨーロッパの進んだ学問知識を遅れていた日本に伝えた」と見る先入観を捨て去ってみる必要があるだろう。彼らは日本社会——おそらく中国社会も同様であったであろうが——は固有の伝統を有する高い文化水準を備えた世界であり、日本人を自分たちと対等以上の知的可能性を有する民族であることを認めていた。それゆえ、彼らが日本において計画し、実行に移した教育実践は、ヨーロッパにおいて彼ら自身が学び、また築き上げてきた教育伝統の意義を、彼ら自身にとってもあらたな文化との対話の中で問うてゆく実験と挑戦の場であったように思われる。

## The Jesuits school education before the period of the persecution

Naoki KUWABARA

In this article, I have tried to survey the history of the Japanese Jesuits school education before the period of the persecution. And I have also tried to elucidate the meaning of the Japanese development of the Jesuits' educational ideals that was in the pioneer days even in Europe. Specifically, I clarified to what extent did Jesuits school in Japan inherit the educational ideals, which the tradition of the Jesuits school in the Europe accumulated, and in what aspect did they make the effort of adaptation to the Japanese society.

The master plan of the Jesuits school education in then Japan was elaborated by Alessandro Valignano s.j., and the contents of the education in Collegium were framed by Pedro Gomez s.j.. In a word, the educational ideals that the tradition of the Jesuits school had built were nothing but the education based on the Christian humanism. Valignano was going to introduce the European school education system based on the idea of the humanism into Japan.

But in Japan, Valignano made a change into the European style of the humanistic education. As for the European humanistic education, the central point was laid on the linguistic training and the classic education both in Latin and Greek. In contrast, Valignano replaced the study of the Greek language and the Greek classic with that of the Japanese language and the Japanese classic. This fact shows how they intended earnest dialogue with the Japanese culture, considering the circumstance that "education of national language" did not yet develop in the Europe in this time.

In the course of study in the Collegium that was planned under the leadership of Gomez, the highest standard of the western natural science at that time, and the newest Catholic theology based on the Concilium Tridentinum were introduced into Japan. The point worth paying special attention is the fact that the "*De Anima*" of Aristotle was chosen as the theme of the course of the philosophy. It shows that they were going to try an earnest dialogue with the Japanese religious view over the concept of the soul in particular.

The Jesuits recognized that Japanese society was a society with a high cultural standard, and Japanese people was the people having no less intellectual possibility than that of them. Perhaps the Chinese society would be similar, too. The education that they planned and practiced in Japan, seems to have been an experiment and a challenge to test the significance of their tradition of the education that they themselves had received in Europe, in the dialogue with the unknown cultural background.